

博士學位論文内容の要旨

学位申請者氏名	中村 晴香		
論文題目	イギリス小説におけるポストヒューマンの表象 —— 『フランケンシュタイン』から『わたしを離さないで』まで		
論文審査担当者	主 査	鴨川 啓信	㊟
	審査委員	金澤 哲	㊟
	審査委員	松宮 園子	㊟
	審査委員	武田 美保子	㊟

論文タイトルにある「ポストヒューマン」とは、人造人間やサイボーグ、クローンなど、人間を基礎として科学によって創り出された存在のことを指す。現代の科学技術の発展は、かつてはSF小説等のフィクションの中のみ存在していたものを、現実的事象として現出させるようになった。しかしながら、ポストヒューマンという言葉自体は、最近の発明というわけではなく、1888年 H.P. Blavatsky の *The Secret Doctrine* にまでその歴史を遡ることができる。Neil Badmington は “Posthumanism” のなかでその変遷を詳細に論じ、この言葉の「シニフィアンはむしろはやく生まれすぎたために、時が来るのを辛抱強く待っていたように思える」と述べている。

ポストヒューマンという概念が現代において問題化されてくるとき、身体的にも、イデオロギ一的にも、人間をそれ以外と区別する境界が曖昧になっている状況を浮き彫りにする。医療において身体器官を人工物と交換することが日常的に行われ、人間を人為的に作ることも可能かと思わせられる今の時代に、私たちは何をもって「人間」と呼ぶことができるのか。本論文では、こうした問いを文学における表象の問題として捉える。具体的には、19世紀から現在に至るイギリス小説、とくに典型的な怪物物語である Mary Shelley の *Frankenstein* (1818) を始めとして、H.G. Wells の *The Island of Doctor Moreau* (1896) と *The Invisible Man* (1897)、Bram Stoker の *Dracula* (1897)、Robert Louis Stevenson の *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* (1886)、そして Kazuo Ishiguro の *Never Let Me Go* (2005) の6作品に焦点があてられる。これらの作品には、人間に似ていながら人間ではなく、時に「怪物」と呼ばれるポストヒューマンたちの存在が描かれており、そのような作品を論じることで、人間と人間でないものを差異化しうのか、そして人間とは何かといった問題について文学的表象からの考察が示されている。

第1章「怪物の誕生」では、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』が取り上げられる。ゴシック小説に分類されるこの作品は、科学の力で新たな生命体を創り出そうとする点で、SFの始まりとも言われてきた。テクノロジーによって人間や動物の死体のつぎはぎから創り出された怪物は、外見的には人間ではないが、内面的には人間とほとんど変わらない成長過程を辿り、人間が経験する行為を反復していると言える。人間特有のものとされている言語を習得しながらも、

人間ではないものと位置づけられ、苦しんでいる怪物の姿は、怪物がいかにかに人間的であることを示しているようである。また、人間独自の共同体である家族との関係性に苦しんでいる怪物の様子は、作者メアリ・シェリー自身の家族関係における苦悩と重なる。そうしたことから、人間の出産を思わせる怪物の誕生とその擬似的な親子関係を考察することで、怪物が怪物となっていくその過程が、物語内と物語を取り巻く背景との両面から考察されている。

第2章「怪物の世紀末」では、H.G. ウェルズの『モロー博士の島』とブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』とが主に扱われている。この章では、優生学が流行した19世紀末の作品について考察することで、人々に怪物と見なされる存在が、当時の歴史的背景をどのように反映しているのか分析されている。その際とくに重要であるのが、Charles Robert Darwinが1859年に出版した *On the Origin of Species by Means of Natural Selection* と、そこから派生する Max Nordau の *Degeneration* (1892) である。人間の進化と退化についての議論が活発になる中、そうした議論が社会にもたらした変化は、種の序列化と言うべきものであった。とりわけ、大英帝国の拡大に伴う帝国主義的な営みの中で、当時の英国には、植民地の異人種や原住民を文明化、人間化しようとする動きがあり、人種やジェンダーの境界が激しく揺れ動いた時代であったからだ。ヨーロッパ中心主義や白人中心主義、あるいは男性中心主義的な考えの下、人間と人間ではないものを画定しようとするこうした境界の線引きは、実際には非常に恣意的なものである。こうした問題を明らかにするために、第1節の「動物と人間のあいだ——身体と法から読む *The Island of Doctor Moreau*」では、この小説の中で描き出される科学的に急激な進化を強いられた「動物人間」と人間との「差異」に関する考察が示される。ウェルズは、動物と人間との境界を定める方法として身体と法をとりあげているが、そのどちらもが確固たる境界を設定するには至らず、そこには境界線を画定することの不可能性が示されている。そして、動物と人間の間には本質的な違いがないということを示すことで、こうした差異を決定する基準それ自体が孕む恣意性を明らかにしている。

続く、第2節「*Dracula* の図式化される二項対立が示すもの」では、共同体内の住民と外部からの移民、男性と女性、さらに異なる二種類の女性像といった、作中で提示される二項対立を取り上げ、出版当時のイギリスの背景を考察しながら、人間外の存在である吸血鬼ドラキュラ伯爵にそうした背景がいかにかに重ね合わされているか、また、重ね合わされていることで怪物が纏うこととなる役割について考察されている。

第3章「変身願望」では、ロバート・ルイス・スティーブンソンの『ジークル博士とハイド氏』、および H. G. ウェルズの『透明人間』が取り上げられている。ともに人間の二面性を描き出す作品であるが、科学の力によって解放される人間の内に潜むもう一つの自己に注目することで、身体の役割について解説されている。こうした作品にみられるダブル (double) の表象はとりわけ後期ヴィクトリア朝の時代に多くみられたが、それは、第2章でも言及されているように、世紀末という時代は様々な境界が揺り動かされた時代であったからで、さらに都市内において貧富の二極化が進んだ時代でもあった。そうした都市の二面性に呼応するように生み出された作品を、一つの身体に内在する善と悪が個人レベルの身体表象として示されていることを考察するために、第1節「*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* における媒介としての身体」では科学によってジークルのために創り出されたハイドの身体が、ハイドのみならず遭遇する人たち全ての

欲望を投影する器として記号的な役割を果たしているということを、ハイドの「言い表せない」、「変容する」、「魅力的」という三つの身体的特徴に注目し論じている。そして、第 2 節「*The Invisible Man* における透明性」では、自らの承認欲求を満たすために新しい身体を求める主人公グリフィンが、望んでいた透明な身体を手に入れたことで、示されることとなる透明な身体自体に付与された意味について論じられている。

第 1 章から第 3 章で取り上げられている、19 世紀における人間と人間ではないものとの境界のゆらぎのテーマは、現在でも変わらず、むしろ現実にはクローン技術などが確立されてきている時代においてはより切実な問題として、文学作品の中に描かれている。第 4 章「ポストヒューマンの行方」では、私たちと同時代の作家カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』が取り上げられる。クローンの視点で物語が語られていくこの小説は、「普通の」人間らしいたわいのない日常生活を描き出している。そのため、人間と人間ではないものを隔てるものが何であるのかについて、重要な問題を提示していると考えられる。この章では、オリジナルとされる人間と、そこから作り出されたクローンの優劣関係を考察し、複製品の価値を再考した。クローン技術の進歩によって、恣意的な境界を設けること自体が困難になりつつあること、そして分類そのものの価値が問い直されていることが論じられている。

人間と人間ではないものとの境界を揺るがす 19 世紀当時の小説や現代のクローン人間を描いた小説の分析を通して、線引きをしようとする行為そのものが孕む恣意性や、そこから示される不安定な優劣関係を垣間見ることができる。本論文では、ポストヒューマンという観点から、こうしたものの表象を検証することで、人間という概念が作られていくプロセスを追っていく。そこから、何が人間として表象され、何がそうでないものとして排除されているのかということ进行分析し、人間とは何かについての考察を試みたものである。

こうした作品分析を通して明らかになることは、人間という概念が歴史によって変容してきているという、その概念の歴史性である。人は時代毎の思想や科学水準といった社会的要素に影響を受け、異質なものを周縁へと追いやってきたが、両者の間の境界は、恣意的に画定されたものであり、政治的に都合よく創り出されてきたものである。したがって、イギリス小説におけるポストヒューマンの特質を考察することは、イギリス文化の一つの特質を明らかにすることである。文化的表象を支える時代の言説は、イデオロギーとして人間を統御し、19 世紀においては帝国の拡大に貢献し、宗主国の人間とそれ以外の存在との差別を押し進めてきた。こうした経緯をみると、イギリス小説の中の表象の分析を通して示されるのは、いかに人間が人間の定義を利用してきたか、ということである。本論文では、19 世紀的ヒューマニズムが特定の人間集団を特権化するものであり、「機械や動物、そして他の人間ではない全ての存在」を恣意的に排除する論理であることが明らかにされる。そして、いわゆる「ポストヒューマニズム」の観点から、文学作品、文化現象、そして人間のあり方という哲学的主題の再考が促されている。

